

日本型アカデミック・アドバイジングの挑戦④

アカデミック・アドバイジングは、すべての学生の自律的な学習を支える「大学教育の基盤」として、その中核を担う役割が期待されている。しかし、それを定着させるには、多くの関係者が立場を超えて協働する体制の構築が不可欠である。第4回では、職員によるアカデミック・アドバイジングを導入し、アカデミック・アドバイザーが「ハブ」となって学内組織や教職員と連携を進めている、京都芸術大学学習支援・教育開発センターの竹内里実氏に、その実践を紹介してもらう。

職員によるアカデミック・アドバイジングを始めたのは、カリキュラムの構造が、業務負担も大きく、十分な学習支援を行うことができなかった。教員からは「教員が意図する履修指導と異なる指導が行われるのではないかと、まず挙げられるのは」といった不安の声が寄せられた。

日本の大学におけるアカデミック・アドバイジング（以下、アドバイジング）導入の課題として、まず挙げられるのは、人員の確保である。米國と違い、専門職としてのアカデミック・アドバイザー（以下、アドバイザー）を確保することは非常に難しい。そこで、京都芸術大学では職員をアドバイザーとし、段階的に組織的なアドバイジングを構築してきた。

導入当初の2024年度は、教務系職員3名が他の業務と兼務する形で、ベテランの教務職員を割くことができたように、アドバイジングの教務職員が「すべての学生の成長を支える教育的活動」であるという実感が生まれ

京都芸術大学 竹内里実



学内組織との連携・協働

2026年度からは、職員6人に加え、新たに教職2人を採用し、教職

グのほか、正課内外の学習支援プログラムの企画実施、ラーニング・コミュニティの運営、新入生面談等を行っている。アドバイジングは事前申込みとしているが、拠点となるラーニング・コミュニティにアドバイザーが常駐していることで、学生はいつでも気軽に学習相談を行うことができる。「日本語学習支援」では、日本語教育を専門とする教員が、留学生の日本語教育ラーニング・サポーター

には、日常的なラーニング・コミュニティの運営や学習支援プログラムの企画運営から始まり、いずれは学生によるアドバイジングへと活動を段階的に拡大していくことが期待される。また、アドバイザーと連携し、学生の視点からセンターの学習支援活動を改善・向上していく役割も担ってもらいたい。

学生が大学に適切に生活環境、人間関係など、複雑な要因が絡み合っており、それぞれを切り分けながら解決していく必要がある。その要因や段階に応じて、各専門組織が個別に対応するだけでなく、組織的なネットワークを機能させることが不可欠である。実際に、この4月から、それぞれのセンター間で学生のつまづきや課題を組織的かつ迅速にリ

協働の「学習支援・教育開発センター」を設置した。センター組織とすることにより、アドバイジングを個別的な取り組みではなく、全学的な取り組みとして持続していくことができる。また、学内

や学習支援、大学院生のアカデミック・ライティンクまでを支援している。教育開発では、アクセスを育成し、メンバーとして参画してもらうことを計画している。2026年度の第2クォーターから正課外科目「ラーニング・サポーター基礎」を開講し、修了生からサポーターを採用していく予定だ。

京都芸術大学の学生支援は、各学科教員による「担当教員制度」を核として、一貫して個々の教員中心で行われてきたが、教員の業務負担や対応の属人化が課題であった。2024年度には、学生相談や障がい学生支援を行う専門組織として「学生支援センター」を設置したものの、既存の「キャリアデザインセンター」を含め、これまで

意見を交わし、アドバイジングを通じて見えてきた学生の具体的なつまづきや学習上の課題、変化や成長といったデータや、全学的な視点から見た学習状況データ等を共有し、具体的な意見交換を行っていく。さらに、高等教育を専門とするセンター長を中心に、各学科の教育活動やFDに関する相談・支援先としても、センターが機能していくことを目指している。